

---

傀 kai-

鶴宮 千尋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傀 k a i -

### 【Nコード】

N 5 4 1 7 W

### 【作者名】

鶴宮 千尋

### 【あらすじ】

もし人鬼が咲の世界にいたら。これは「むこうぶち」と「咲・s a k i -」のクロスオーバー二次創作小説です。闘牌シーン多めでお送りいたします。特に、むこうぶちキャラ対咲のキャラの対局を多くしたいと思っています。人鬼がノーレートのメイド雀荘に足を踏み入れたり、表の大会に参加したりで必然的に傀さんのキャラは崩壊しています。なるべく原作の雰囲気は尊重したいと思います。特にむこうぶちキャラはキャラ崩壊する傾向が強いです。（まだ人鬼しか出てないけれど）「むこうぶち」はコンビニ版と、たま

に買った近代麻雀でしか読んだことないので、ここがおかしいと思っ  
たらどんどん指摘してやってください。

## 邂逅・1（前書き）

原作の第三局で、藤田プロが咲と和をへこませるシーンの藤田プロを、傀に書き換えてみました。

第一話、しかも人鬼初登場！ということ、ずっと闘牌シーンが続きます。会話が少ないのもご愛嬌、ということでしょうかよろしくお願ひします。

## 邂逅・1

roof-topの扉を開けて中に入ると、藤田は辺りを見回してそれらしい二人組の高校生を探す。

この店は、いわゆるメイド雀荘というやつだ。その二人は今日ここでメンバーをしているはずだから、メイドの衣装を着ているはずだ。

久からは「二人をへこませてね」とお願いされていた。清澄高校麻雀部期待の一年生らしい。

二人はすぐに見つかった。へこませろって言われるぐらいだから、天狗にでもなっているかと思っていたのだが

二人組の片割れ、黒髪の少女はうつむいていた。周りの牌音にかき消されているが、よく見れば泣いているのが分かる。

隣に座っている桃色の髪の少女は、泣いてこそいないが暗い表情をしている。

どうやら私が来る前に、誰かにへこませられたようだった。

4

それは、藤田が来る数時間前のことだった。

「打てますか？」

声のする方向を見ると、全身黒ずくめの男が立っていた。

若い男だ。すらりとした長身で、髪はウェーブがかかっている。

目つきは鋭く、顔には険がある。

男はその若さに似合わぬ風格というものをまとっていた。何度も死線を越えてきた人間の目つきをしている。

まこは、この雀荘でいろいろな人間に出会ってきた。しかし、この男のような人を見たことはなかった。

まこは一目見て、その男が裏の世界の住人であることを悟った。

「……ここはノーレートの店じゃけど」

おずおずと、その男に向かって言う。  
「かまいません」

彼は表情一つ変えずにそう言って、咲と和のいる卓へ向かった。

宮永さんが震えている。

あの男が店に入ってからだ。知り合い？ そうは見えないけれど、黒づくめのその男は、店に入るなり私たちの卓に席をついた。俳優だと言っても通じるような端正な顔立ちだ。しかし、どこかマネキンを連想させるような冷たい表情をしている。

「君、名前は？」

私の上家に座っていた小太りの中年の男が尋ねた。髪は薄く、目が線のように細い男だ。

「……傀カイと呼ばれています」

男は低い声で答えた。甲斐さん、というのでしょうか。

彼はまるで値踏みをするような目で私たちを見て、言った。

「では、始めましょう」

東一局 起家・傀 南家・中年の男 西家・咲 北家・和

何なんだろう、この人。まるでお姉ちゃんと対局したときのよう  
な、そんな感じがする。

なんだか嫌な感じだ。「強い」人なんだろうか。

「煙草を吸ってもいいですか」

「やめてくれえ、僕煙草の煙苦手なんだ」

「……そうですか」

傀と名乗った男は、取り出しかけた煙草の箱を懐にしまうと、少ししゅんとした表情をした。

なんだろう、さっきのあの感じは今では欠片も感じられない。さ

つきのは気のせいだったのだろうか。  
でも、とりあえずはこの人の親を蹴らないと。  
配牌を取って、理牌する。なかなかの好配牌だ。

???????四五八北北北

ドラは六萬。オタ風の北が暗刻で両面塔子が二つある。ドラ受けもできるし、北はカンもできそう。

第一ツモはドラの六萬。打白とする。幸先の良いスタートだ。

「リーチ」

そう言っつて、宮永さんは千点棒を取り出した。捨てたのは九筒。まだ六順目で、私の手はニシャンテン。聴牌したとしても役なしで、もう降りるしかなさそうだ。

私は宮永さんが四順目に捨てた七索を捨てた。

傀さんはノータイムで現物の白。これだけでは押しているのか降りているのかはわからない。

南家の男は、少し考えてから現物の八萬を捨てた。降りた、というよりいったん回ったのだらう。

そして、二順後。

「カンッ」

宮永さんが北をカン。そしてその手は嶺上牌へと伸ばされる。

「立直、嶺上開花、自摸。裏ドラが……北でドラ五。倍満です」

ツモったのは五筒。二五筒の待ちだった。

????????四五六北北北<sup>カン</sup>

いきなり4千点の支出だ。そして傀さんは親つかぶりで八千点の支払い。

一回戦は、宮永さんらしいあがりで幕を開けた。

そして、東三局。

「カン」

そして宮永さんの手は嶺上牌を掴む。

「……嶺上開花、自摸、三色で親満です」

この局も、宮永さんの嶺上開花で終わった。

東二局が全員ノーテンで流れた後の東三局、宮永さんの親だった。中盤の十二順目にツモった西をカンしたのだ。

「これで二回連続嶺上開花かあ。まいつちゃうねえ、こつも続いた  
ら」

私の対面の男が呟く。

こんなものを見たら、普通彼のように驚くだろう。滅多にあがれない嶺上開花を、二回連続であがったのだから。

私はとっさに傀さんの方を見た。彼がどんな反応をしているのか気になったからだ。

しかし、そこにあつたのは私が予想していたものではなかった。

見下したような目に、口元はわずかに吊り上っている。

彼は明らかに冷笑していた。それも見る者をぞつとさせる様な表情で。

私は背筋が寒くなるのを感じた。これは人にできる表情じゃない。



## 邂逅・2

東三局・ドラ二索

東家・咲	53000点
南家・和	17000点
西家・傀	13000点
北家	17000点

これで傀さんとは40000点差。ほとんど安全圏とっていい点差だ。

この三局、傀さんは一度も仕掛けることがなかった。あの感覚はやっぱり気のせいだったということなのだろうか。

前局、親の咲が和了したので連荘だ。

咲は配牌を開けて理牌する。

14577?????五七九 ツモ二

ここまでのあがりで勢いに乗れた、ということなのか好配牌が来ている。

ドラこそないが、軽くあがれそうな手牌だ。

もし配牌が悪かったら、一巡目からでも降りるつもりだったんだけど……

この手なら聴牌までまっすぐ打つべきだね。

咲は手牌から一索を切り出した。

そして、六順目。

引いてきた牌を見ると、それは六萬だった。これで聴牌。

34577?????五七九 六<sup>ツモ</sup>

ここまで中張牌ばかりを引いてきて、三索、八筒を引き入れていた。

好配牌、好ツモの結果の六順目断ヤオ聴牌だ。

九萬を捨てれば、次のツモの八筒をカンして嶺上牌の二筒で和了だ。

咲はノータイムで九萬を河に捨てた。

「ポン」

その鳴きで、次のツモであるはずだった八筒は他家に流れた。私の八筒が

その声の主は対面、傀さんだった。手牌から三索を捨てている。シヨックを受けている場合じゃない。反射的に傀さんの捨て牌を見る。混一色ではなさそうだ。二順目に二萬を捨てているし、そもそも一巡目に原村さんが捨てた東に合わせ打ちしている。

それは、典型的なタンピン系の捨て牌だった。しかし九萬を鳴いてしまったては、断ヤオや平和はつかない。おそらく、役牌暗刻かバツクだろう。

原村さんが牌を捨てたのを見て、次のツモへ手を伸ばす。一萬。ツモ切りだった。

そこから5順、ツモのすべてがヤオ九牌だった。もちろん、全部ツモ切り。

まるで配牌から続いてきた好牌の流れが、さっきの鳴きで流れてしまったかのよう。

そして、あの鳴きから6順後。

「ツモ、10002000」

傀さんが、五筒を引き入れて和了した。

九九九<sup>鳴</sup> ???????22? ?<sup>ツモ</sup>

咲はすぐに気が付いた。傀さんの手牌は完全に理牌をされていない。

手牌の右端に、他の筒子から孤立するように並べられた八筒。それはたしかあの鳴きの次のツモだったはずだ。その時だけ微妙に牌をツモるスピードが違かったから、印象に残っていた。

やはり、あの時鳴きがなかったら八筒をツモってたんだ。……そして、この並べ替えは八筒を喰い取ったことを宣言したってこと？ それに、よく考えれば和了牌の五筒もツモれていたんだ。ということは、あの鳴きは好ツモを喰い取るための鳴き？ そんなのあるわけない。とは言い切れない。自分の嶺上開花だって、他の人から見れば十分異端だろう。同じように、相手の好ツモの流れを喰い取れる鳴きというものがあってもおかしくない。

だけど、そのときはその鳴きがとても恐ろしいもののように思えた。

東四局 親・和 南家・傀 西家 北家・咲 ドラ中

続いて東四局目。親は原村さんだ。

心なしか、牌をツモる手に力が入っているように見える。まだノ<sup>ホーラ</sup>和了だからかもしれない。親のここで点差を縮めておきたいだろうし。

傀さんは少し怖いけれど、まだ34000点差ある。なるべく早い手で場を進めたいところだ。配牌は、

??????35八九九南北

あまりいいとは言えない。北が重なればいいんだけど……

牌山に手を伸ばす。ツモを見ると、一筒。ツモ切りする。

??????12233九九

九順目でこの形。今度こそ、次ツモの二筒をカンして嶺上牌の一索で和了だ。

しかし、  
「槓」

傀さんは四枚の六萬を晒した。彼の手が嶺上牌に触れようとする。咲は思わず涙ぐんでいた。私の一索、取らないで。彼はその嶺上牌を手牌の右端に置き、再び宣言する。

「槓」

晒したのは手牌の左端にある七萬四枚。そして、

「リーチ」

嶺上牌の北をツモ切りリーチ。リーチ棒が卓の上に置かれた。彼の目はずっと私の目を捉えている。

お姉ちゃんと打っていた時と同じ感覚。それが咲を捉えて離さなかつた。

そうする間にも、西家が北をツモ切りし自分のツモが回ってくる。中。一枚も場に切れていないドラだった。

この中は切れない。だとしたら何を切る？ 現物は一枚もない。それどころか、手牌にあるのは危険牌ばかりだった。

唯一安全そうなのは九萬。六萬七萬とカンされている。場を見回すと、原村さんが三順目に切っていた。

あったとしても単騎待ちだけ。ほとんど安牌 のはずだった。  
「リーチ一発三暗刻」

傀さんが手牌を倒す。

五五五九231 六六六六 七七七七

「御無礼、ドラ七で24000です」

傀さんが、宮永さんからトップ逆転の三倍満直撃を和了した。

しかし、今のあたりはどこかおかしい。そう私は感じた。まるで宮永さんが九萬を持っていることを、知っていたかのようなあたり方だ。

ツモ切りリーチだったから、七萬カンの前にすでに張っていたはずだ。カンしなければ八萬九萬の二面張だったのを、カンすることで九萬単騎に待ちを狭めている。

もちろんカンすることで三暗刻を確定する、という理屈は理解できる。それに七萬をカンすることで、九萬の釣り出しが期待できることも。しかし、私はどこか引つかかるものを感じている。

宮永さんの捨て牌を見ると、

南？西北8一五八？九

この捨て牌から宮永さんが九萬を持っていることが分かるのだろうか。

このなかで九萬の周りの牌は 八順目に捨てた八萬だ。これは確か手出し、だったように思う。

八萬の手出し。 これだ。

八順目で手出しということは、この八萬は単なる孤立牌ではなかったはずだ。しかし、傀さんは六萬と七萬をカンしている。つまり、この時の宮永さんの八萬周りの牌姿は、三通り考えられる。

八九九九

八九九

## 八九

このうち、傀さんの手牌にある九萬と併せて考えると、私が三順目で九萬を捨てているので八九九九の形はあり得ない。

また、もし八九の形だったら、八萬に続いて九萬が捨てられるはずだ。しかし、宮永さんが次に捨てたのは一筒。だから八九の形もあり得ない。

残ったのは八九九の形から、八萬を捨てて九萬を雀頭として固定した、というケースだ。

まさか、傀さんはこんな読みを働かせて九萬単騎を選んだのだろうか。

九萬持ちを読み切った上で、九萬対子落としを狙い撃ち      !?

私は、なんだか空恐ろしいような感覚を抱いた。

### 邂逅・3

南一局

東家・傀	41000点
南家	16000点
西家・咲	27000点
北家・和	16000点

南一局。トップ逆転の三倍満直撃を和了した傀が親だった。

咲は、言い様のない喪失感に襲われながらも打牌を続けていた。

前局の傀さんの六萬カン。奪われてしまった一索。これらのことがずっと頭から離れない。

そして、ずっと張り付いているある感覚。恐怖だ。

咲はほとんど上の空の状態で打ち続けていた。

ツモった牌を手牌に入れ、不要牌を切り出す。まるで機械のよう

に。  
幸いこの局は特に他家にも動きはなく、八順目まで来た。

4567四四五???????

ほとんど手成りで進行してきた。

一シャンテンではあるが、いつでもカンが出来る態勢だ。嶺上牌の六萬が手牌に入れば聴牌。

いつもなら、咲は聴牌までカンをせず、嶺上開花を狙うだろう。しかし。

(早くしないと私の六萬が取られる……)

もう嶺上牌を取られたくない。咲の頭の中はその一事が支配していた。

「カンッ」

咲は九筒四枚を晒して言う。

手を嶺上牌へと伸ばそうとするが

「御無礼、ロンです」

「えっ」

暗カンを槍槓！？ それってまさか　！？

傀さんが手牌を倒す。

一九？ 19 東東南西北白發中

「48000点です。トビましたね？」

それからまさに傀さんの独壇場だった。

誰もあがれず、誰も放銃しない。ずっと傀さんのツモあがりが続いた。

私も宮永さんも傀さんのあたり牌を何度も捨てた。しかし、彼はきまつてその牌を見逃し、直後に高目をつもあがるのだった。

「ツモ四索、6000オール」

「なんでえ、咲ちゃんの七索であがつてるじゃねえか」

「御無礼しました……ここで勢いを殺せませんので」

私は勝負に参加すらさせてもらえなかった……。あがりはもちろん聴牌さえもできず、振り込むことさえ許してはもらえなかった。

「これで五連続トップです……続けますか？」

何も答えられない私たちを残して、彼はそのまま姿を消した……



「それで全部？」

「そうじゃけど」

藤田の言葉にまこが答える。

まこが見ていたのは、最後の三半荘だけだった。最初の二半荘の様子は終局後に和から聞き出していた。

ほとんど茫然自失の態だった咲と和の代わりに、後から来た藤田に事情を話したのだった。

「傀、か……」

藤田が呟くように言う。

「知っておるのか？」

「……おそらく私が知ってるのと同じ人物だと思うんだが」

齒切れが悪い様子で藤田が答える。

「その傀というのは一体何者なんじゃ？」

「去年プロアマの親善試合があつてねえ」

唐突に藤田が言う。

「その時優勝したのが傀つて男。でもいつの間にか会場からいなくなつて、その試合は最後まで競つていた二着の子が繰り上げ一位になつた」

あくまで淡々とした態度を崩さずに、藤田は告げた。

その言葉を聞いて、咲は呟く。今まで張りつめていた緊張が解けたような、ホツとした声で。

「その人プロでも勝てないんだ……じゃあ仕方ないよね……」

「プロでも勝てないのに、高校生の私が負けるのは当たり前……だよね……」

「当たり前じゃないですよっ！」

その和のあまりの剣幕に、咲はびくりと体を震わせた。

そのあまりの圧倒的実力差を目の当たりにしたうえで、言い切つた。傀さんに対して何もできなかつた自分が悔しかつたのだ。

和の様子を見た藤田は、付け足すように言った。

「そうそう、その試合私は三位だったんだが、その繰り上げ一位だった子っていうのは」

勿体ぶりながら、藤田は続けて言う。

「当時十五歳の高校生」

「竜門渕高校の天江衣　　！！」

### 邂逅・3 (後書き)

この後の展開は、原作と同じです。

それにしても傀と最後まで互角に渡り合った天江衣とはいったい何者なんだ(棒)

## 見逃し・1 (前書き)

「社長、これを」「ズクで30? わしにまた負けるといふんかね?」  
「的なり取りはノーレートじゃできないよなあと思いつながら書きました。」

## 見逃し・1

放課後、優希は r o o f - t o p に麻雀を打ちに来ていた。

今日は部長が学生議会議長の仕事を立て込んでいるということ department で部活を休み、染谷先輩もプライベートな用事があるとかないとかで、授業が終わって早々学校から帰ったらしい。そのため今日は私たち一年生は自由に練習しておくように、とのことだった。

部室にいたのは私を除けばのどちゃんと咲ちゃんだ。のどちゃんは黙々とツモ切り動作の反復練習、咲ちゃんがネット麻雀に悪戦苦闘していた。

静かな部室に響く、単調な牌の音。たまに小さく咲ちゃんの悲鳴が聞こえる。

二人とも黙って自分に課された課題をこなしていた。

話しかけるのもためらわれる空気がそこにはあった。さすがに私でもいづらい雰囲気だった。邪魔する訳にもいかないし……

そこで、二人に断わってここに来た、というわけだった。

平日の午後ではあるが、それなりに人は入っている。待つこともなくすんなりと打ち始めることができた。

「ロン！ 中のみ1000点。……これで終了だじえ<sup>ラスト</sup>」

オーラス、東四局終了時には二万点近くあったリードも二千字差に詰め寄られていたが、これで逃げ切り成功。

勝負に出ていた二着目の放銃だった。

「いやあ、あと二千字だったんだけどなあ……聴牌ってたんでつい打っちゃったよ」

倒した手牌を見ると、三色ドラの聴牌。

ぎりぎりの勝負だったじえ……聴牌があと一順遅かったら、振り込んでいたのはこっちだったかもしれない。

しかし、これで三半荘打ってトップ、二着、トップ。全部序盤の

貯金を守り切つての結果だった。

「しかし俺はこれで三回連続ラスだ……負けっぱなしつてのもイヤだし、あと一回、できないかな？」

この半荘ぶつちぎりの最下位が言った。あがったのは一回だけで四回も放銃した男だ。もう一回打つてもこの男には勝てるだろう。しかし、

(タコスぢからが切れてきたじえ……)

持ってきたタコスは三半荘分だけ。もう残っていない。

もうここがやめ時かな、と思つていたところ、

「……これを」

対面の黒ずくめの男が紙袋から取り出したのは まぎれもなくタコスだ！

しかも、その包装は、上島屋の期間限定品のタコス！ 一時間は並ばなきゃ手に入らない代物だ。

「くれるの？」

「どうぞ」

黒服の男からタコスを受け取る。……持っているだけであふれんばかりのタコスぢからを感じる。

包装を取ると、口に運んだ。

「はむはむ……お、おいしいじえ」

「続行でよろしいですね？」

黒服の男がタコスを食べる優希に向けて言った。

「もちろんだじえ！」

東一局 東家 南家・傀 西家 北家・優希 ドラ八萬

東一局、私は北家だ。タコスの恩人は対面に座っている。

しかし、上島屋のタコスをもつてしても、起家を取れなかったば

かりか北家とは…… これじゃあ親が回ってくるのは東四局、それまでタコスぢからが残ってるか少し不安だじえ。

1 3 二四五六七九九南西西

配牌はドラがらみの混一色が濃厚な手だ。役牌がないので、できれば門前で進めたいところだ。

第一ツモは一萬。一索三索のカンチャンを外すところだが、三索から外すことにする。

親が東四局まで来ないんだから、この手はできるだけ高い手に仕上げたいし、そうするとこの手は鳴くことはできない。だったら最初から混一を匂わせておけば足止めにもなる。これまでの私の打ち筋を見れば、私が東場に強いことは相手も分かっているだろうし、私が混一手だと分かれれば牌を絞ってくるはず。

私だつてこれくらいのことば考えてるんだじえ！

五順目。西をツモって聴牌。

一二三四五六七九九西西東 西<sup>ツモ</sup>

有効牌ばかりをツモってすんなりと聴牌した。しかし、問題なのは

3 1 南北

捨て牌が全然混一にみえないじえ！ ……別に迷彩になっているのならそれに越したことはないけど。なんだか目論見が外れたみたいで少し悔しいじえ。

それはともかく、

「リーチっ」

東切りでリーチ。千点棒を取り出す私。

「ポン」

一発消しをかねての東ポンかな。鳴いたのは対面の黒服の男。  
タコスをくれた人だ。

彼が切ったのは四萬。私の和了牌だ。

「ロン、8000点！」

一発を消すにしては、簡単にあがり牌を捨てる。それとも東ポンで聴牌だったのかな？

東三局 東家 南家・優希 西家 北家・傀 ドラ八索

東二局も私が2600点の手をあがって終わった。放銃したのは、また対面の人だった。一発を消してからのリーチ牌の裏筋で放銃。もしかして、初心者か？

今まで振らずあがらずの三着を続けてきたのに、この半荘はなんだかおかしいじえ。

しかも二連続振込みだというのに、涼しい顔をしている。

この半荘、何か企んでいるのか？

気を取り直して、東三局の配牌はこうだった。

四五六七2245678西北

楽勝！ どう見たってメンタンピンドラーツモだじえ。……と思  
ったら第一ツモが九索。いきなり断ヤオが消えた。とりあえず打、  
北。



四順目、ツモは二筒。これで聴牌だ。

四五六七223456789 2 ツモ

四萬か七萬を切れば六面張の高目一通の手だ。一発ツモが楽しみだじえ。

……ただ気がかりなのは対面の存在だ。ここまで二局連続一発消しに即放銃。一度もツモらせてくれなかった。

四萬と七萬、どっちが鳴かれない？ どちらも場に一枚も切れていない。判断材料皆無。だったら、

「リーチ！」

切ったのは七萬。考えても仕方がない。鳴かれたらその時だ。

「ポン」

またポン！？ 予想していたことであつたが、やはり実際にされると驚くものだつ。そこまで一発消しが好きなのか？

そして対面が捨てたのは……九萬！ また和了牌だ。

「ロン、2600点」

初心者つてレベルじゃないじえ！ 一発消しするなら現物を切るべきだじえ！……まだ四順目で安牌なんて字牌ぐらいしかないけど、と自分でツツコミをいれてみる。

しかし、これで三回連続。まさか、わざとやっているのかっ!？

東四局 東家・優希 南家 西家・傀 北家 ドラ六萬

やっと、私の親だ。しかし、せっかくの親なのに、

1469???三六八白白東

この配牌はないじえ！ これはなんとか白を鳴いて連荘するしかない。この手は白とドラ一つで2900点の手で満足するかな。

……と思っているうちに、

「東、ポン」

「二索、ロン」

あっという間に親を蹴られた。あがったのは対面。

1 1 1 3 四五六七八九 東東東<sup>ポン</sup>

東ドラの2000点。まさに今私がやろうとしていたことだ。

せつかくの親だったのに、何もできずに流れてしまった。

今までずっと張りつめていた緊張感が途切れていくのを感じる。

さすがに上島屋のタコスでも、タコスぢからはこれで切れてしまったのだ。

これで東場が終わり、南入。

しかし、東場が終わって38200点は、あれだけあがったにしては少し物足りないような気がするけれど……まあこの点数を守り切れば私の勝ちだじよ！

南一局 東家 南家・傀 西家 北家・優希

続いている南一局。親は今まで放銃もあがりもせず25000点キープの二着目。ここの親は重要だ。

配牌に手を伸ばす。しかし、理牌し終わらないうちに、

「リーチ」

ダブルリー！？ 切ったのは北。対面のリーチだった。

配牌には自風の北が対子であったのだが、これは鳴けない。手の形もよくないし、鳴いたってリーチに追いつけないからだ。そうこ

うするうちに、自分にツモが回る。ここは北の対子落としか？

私は北切りに決めた。点差があるんだから、無理する必要はない。しかし、

「ツモ、裏裏で30006000」

??????566778六八七ツモ

ダブルー発ツモ断ヤ才裏裏でハネ満!?

役は断ヤ才だけ、こんなの偶然だしえ……しかし、これで対面は今まで放銃した分を取り戻して24800点。一気に原点復帰だ。

私のあがりの合計が13200点だから、このあがりひとつで同じぐらい稼いだことになる。

「南二局、私の親です」

結局、このあがりが対面連荘の皮切りだった。

「リーチ」

南二局の五順目、親の対面が先制リーチだ。

そーゆーのうちのお株なんですケドって思わずつぶやきそうになる。東場と南場の違いこそあれ、このような棒攻めは私の得意技だった。

「嬢ちゃんの次はこっちの兄さんかい。こんなに早いとやってられないなあ」

そう言っ上家はしゅしゅと現物の三萬を切り出す。

私も山に手を伸ばす。ツモは三索。

1222四五七九?????  
3ツモ

対面の捨て牌はこう。

西北三八<sup>リーチ</sup>？

現物はなし。見事に危険牌だらけだ。三萬八萬と切られている以上またぎ筋は切りづらいし、一枚も切られてない索子と筒子も簡単には切れない。

かろうじて切れそうなのは二索三枚壁の奥の一索か？

一索を切ることに決めた。手牌端の一索をつかむとそのまま河に捨てる。

しかし。

「御無礼、ロンです。一発が付いて18000点」

23一二三??????東東

一発で高目放銃！？ やってしまったじえ……これで点差は逆転、対面がトップ。それどころかトップとは2万点以上差をつけられてしまった。

「一本場です……」

カチャリ、と黒棒を積む音が聞こえた。

結局、その後対面が三本場まで連荘したところでトビが出て終了。親っパネを放銃した後は、何とか振り込みは避けて二着は取れたけど……南場はあっという間で打った気がしなかったじえ。

負けた、というよりも嵐が過ぎ去って行ったというような感覚。

……負けた気がしないじえ。

「トビで終了か……今日はこれがやめ時ってことかな……」

「何もできずに終わっちゃった……」

卓を囲んだ二人はすくすくこと店を出てってしまった。

残ったのは対面の黒服の男と私の二人だけ。その男は紙袋を抱えながら席を立とうとしている。

「次あったときは、絶対にこの借りとタコス返すぜ！」

と、私は威勢よく黒服の男に宣言する。

「タコスの借りを待つのはただ一日です……では、明日この時間この場所で」

なぜか再戦の約束を取り付けられてしまった。

ボタン、ドアの閉まる音。黒服の男もドアの向こうへ消えて行ってしまった。

## 見逃し・2

「御無礼、満貫です。黒棒の差で逆転ですね」

例の黒服の男は、店の奥の方の卓で打っていた。見たところオーラスで満貫手をつもあがり、トップ逆転といったところだろう。まくられたのは彼の対面の男らしく、「俺、これで抜けるわ」そう言い残して卓を離れると店を出て行ってしまった。

「タコス返しにきたじえ！」

優希は黒服の男に近づくと、そう言つて手に持った紙袋をドーンと前に突き出した。今日は彼に返す分に加えて、少し多めにタコスを用意してきた。今日はタコス借りるつもりはないからな！

「はい、これっ」

袋からタコスを一つ掴むと彼に手渡す。彼は黙つてそれを掴むとサイドテーブルに置いてあつた、彼の物らしい袋の中に入れてしまった。まった。

「あれっ、タコス食べないの？」

自分の分のタコスを取り出して食べていた優希が訊ねると、

「ええ」

短く男が答えた。それに続けて、

「では、四人揃われたようですので、始めましょう」

手で優希に空いている対面に座るように促すと、彼は言った。

「たぶんまこさんの店へ行つたんだと思います。『タコスの借りを返しに行くッ』ってなんだか張り切つてました」

和が言った。部室にいるのは和、咲、京太郎、まこ、久の五人。

優希の姿はない。

まこと久が昨日の自主練の様子を訊ねていたときのことだった。優希が部室になかなか来ないので、何かあったのかと話題になったのだ。

「タコスの借りい？ 優希のタコス語を理解できる奴でもいたのか」  
京太郎が驚いたように言う。彼もおとといから風邪で学校を休んでいて、昨日部活に來れなかった一人だ。

「さあ、それはどうかしら。でも、昨日誰かにこっぴどくやられたのは間違いないでしょうね。……もしかしたら傀さんかも」

京太郎の言葉を受けて久が言った。傀、という言葉に咲と和が少し真剣な表情になる。

「しかし、あれ以来傀も派手な打ち回しはしとらんからのお。最初だけじゃった」

「でも傀さん、まこの雀荘の常連なんですよ？ 同卓しててもおかしくないはず」

久が反論。続けて、

「それに優希も粗いけど相当の打ち手よ？ 簡単には負けないだろうし、やっぱり私は傀さんだと思っうな」

「確かにそうじゃけど……」

何か引つかかるものを感じながらも、まこがしぶしぶ久の言葉に肯定する。

「そこで、まこに優希の様子を見に行ってもらいたいの。ああ見えて繊細なところがあるから、少し不安だし」

「それだったら私が行きます！」

和が勢い込んで言う。

「和はだめ。あなたは早くリアル麻雀になれないと。……だから、まこ、お願いできる？」

……と、こんな経緯で roof-top に来たのだが、やはり優

希はこの店で麻雀を打っていた。対面には傀が座っている。久  
の読みが当たっていた、というわけだ。

まこが卓に近づくと一瞬優希は視線を上げたが、すぐにその視線  
は卓の上に戻った。「話は後で」とその表情は語っていた。真剣勝  
負らしい。

優希得意の東場で、三順目。ドラは三萬だ。傀の手牌を見ると、

七八八九五七九??????

純チャン三色一盃口まで見える好手牌だ。少し重い手牌ではある  
が、三順目であることを考えれば問題にはならないだろう。

では、優希の手牌は？ まこは優希の後ろにまわって手牌を覗く。

一二六七八九六七八??????

好形イーシャンテン。三筒か八筒を引けば六七八の三色も見える  
上に三面張。有効牌の数も優希の方が断然多いし、これは優希が先  
制するか、そう思ったそのとき。

優希にツモ順がまわり、牌山に手を伸ばす。そしてツモったのは  
八筒。絶好の所だ。

一二六七八九六七八??????

優希は少し考えてから、

「リーチっ」

九萬を切り出して、リーチ。優希は千点棒を取り出す。  
しかし、

「ポン」



その声の主は、傀。しかし、九萬ポン！？ とすると、今の手牌はこうである筈だ。

七八八五七九?????? 九九九<sup>ポン</sup>

まったくあり得ない鳴きだ。七萬を切れれば確かにシャンテン数は下がるが、一盃口も純チャンも三色も消える。役なしのイーシャンテンで、既に鳴いているわけだからリーチもできない。一発消しにしても最悪の鳴き。

しかし、ここからさらに予想だにしない展開を見せる。

傀の手牌から切り出されたのは 九筒。優希のロン牌だった。僅かに可能性の残っている三色同刻まで捨てての九筒切り。しかも二千点の放銃。いや、裏ドラもうまく乗れば八千点まである。

しかし、優希も手牌を倒す気配がない。上家の手は今にも牌をツモる寸前だ。

ここで見逃し！？ 確かにまだ三順目じゃけど、ここはあがるべきじゃろう！ なんぼ九筒が安目であっても。

結局優希はロンせず、上家はツモった後少考してから現物の一萬を切った。

対面の黒服の男は、両肘を卓の上についてじっとこっちの方を見ている。まるで私の動きを一つも見逃さないようにとでも言うつように。

河に放たれた九筒。確かにそれは私のあがり牌だが、これではあがれない。

あがったら相手の思いつばだじえ！

昨日からずつと対面の男の攻略法を考えていた。結論から言えば、この打九筒は相手の罠だッ。

相手の作戦　それは、一発を消してからの安目放銃で場を回し、そして東場の親を速攻で蹴つての南場での逆転だじえ！

私が東場にだけ強いのを利用した作戦　東場に強いなら、東場は安手であがらせて南場でまくればいい。

昨日は跳満の手を満貫で、満貫の手を二千六百点であがらされ、南場二度跳満をあがられてあっさりまくられてしまった……

しかし、今回は違う。この手はあくまで三六筒をツモつての跳満だじえ！

上家は現物の一萬を手出し。おそらくこれはあがりに向かった打一萬ではない。他家が追い付くにはまだ時間がたっぷり残っている。それまでにツモればいいんだじえ！

私は山に手を伸ばす。牌を掴むと盲牌する。　これは……筒子かっ！？

手牌横まで持つてくると、牌を広げる。

しかし、それは八筒だった。二つとなりか……当然ツモ切り。

そして、下家が牌をツモる。ツモった牌を手牌に入れてから、手牌をいじって何か考えているようだ。

牌を入れ替えながら考え込んでいる。もしかして安牌がないのかな？

「九筒が通るなら……リーチするかア」

打九筒で、リーチ。カチャッと千点棒が場に置かれる音。

や、やばいじえ。これこそまさに最悪のパターン「追っかけリーチ」。

本来だったらその九筒で打ち取りだっただけに、さらにたちが悪い。

こっちは、出あがりできないツモ切りしかできないなのに……

三順目で相手も聴牌なんて、そんなの想定外だじえ！

対面は現物の八萬を手出し。相変わらず、彼はずっとこっちを見

つめている。

その瞳を見つめっていると、まるでこっちの考えが見透かされてしまふかのような錯覚を感じてしまう。

わざと和了牌である九筒を差し込もうとしたんだから、こっちがフリテンなのはわかっているのだから。

対面としては、私が下家に放銃するのが理想的な展開なんだろうけど……そんなのまつぴらごめんだじえ！

上家のツモ。ここで上家が下家に放銃すれば一番いいんだけど……捨てたのは、一萬。どうやら一萬の対子落としのようだ。っ

てそんなの分かったって全然意味ないじえ！

とうとうツモ順が回ってきた。恐る恐る牌山に手を伸ばす。

ここで三六筒ツモればいいんだじえ。いや、九筒でもいい。それが、安牌。この場合は字牌も危険だから現物がほしいじえ。

盲牌によると、どうやら筒子のようだけど……

ゆっくりと手牌横まで持ってくる。その牌が何であるのか、見るのが怖い。

指をどけて牌を見る。 三筒。

「ツモつ、裏ドラが7索で、メンタンピンツモ三色ドラドラ40008000！」

助かったあ！ ……でも、もうリーチして見逃しなんて怖くてできないじえ……

「そりゃあ南場に弱いのは変わつたらんのじゃから、負けることもあるじゃろっ」

重大発表があるから早く部屋に戻って来なさい、と部長から電話があつたので、優希とまこは部屋に向かっていた。

「でもなんか納得いかないじゃ……ふつーあれは私が勝てる流れのはずッ！ だって相手の裏をかく九筒見逃しに高目三筒ツモだじゃ？」

「なんじはいつから部長に弟子入りしたんじゃ？ ……漫画の主人公じゃあるまいに、そうそううまくいくものか」

結局あの倍満ツモ以降、優希は全くあがれず南場で傀にまくられてしまったのだった。

優希は半荘三回は打つつもりだったらしいが、結局あの半荘が傀ぶつちぎりのトップで終わった後、傀は「御無礼」と一言言い残して店を出て行ってしまった。

優希も、せっかくタコス多めに持ってきたのに余っちゃったと愚痴っている。 どうせ部活が終わるころには全部食べてしまうのじゃろうけど。

「じゃけど傀もこげな打ち回しをしようとはなあ。咲たちとのきとはまた違った打ち筋じゃった」

毎回こげな打ち回しをされると、うちも困るんだけど……たまにしかせんし、彼目当ての女性客も増えとるみたいじゃから大目に見るしかないんかの。

「京太郎、来てたのかっ」

部室に入って第一声。部室では京太郎、咲、和、部長の四人が麻雀を打っていた。

「風邪は大丈夫なのか？ ……タコスあるからこれでも食べて体力つける」

「お気遣いどうも。で、そっちは『タコスの借り』は返せたのか？ 京太郎が素直にタコスを受け取って言った。

「タコスは返せたけどタコスの借りは返せなかったじゃ……」

タコスとタコスの借りってどー違うんだ、って突っ込みたくなっただけだよめておくことにした。なんだか長くなりそうだし。

「これで全員そろったわね」

部長は席を立つと、ホワイトボードの前まで歩いて行った。

「ところで、和と宮永さん、毎日例の練習やってる？」

例の練習とは、和はツモ切り動作の反復練習、咲はネット麻雀で打つ練習のことだ。

「一応家に帰ってから一時間はやるようにしてますけど……」

「部室のパソコンでなら毎日やってます」

突然の質問に二人ともおそおそと答える。

「……そろそろ実戦練習に入ってもいいころよね」

そう言っただけ部長はホワイトボードのふちに手をかけると、くるとホワイトボードを回転させる。その裏面には、

「強化合宿……！」

「そ、やっと合宿棟の場所がとれたの。今週末から十日間、みっちり麻雀漬けだから覚悟しといてね？」

部員の顔を一人一人見回しながら部長が言った。

「うちの友人でちいーとだけ麻雀の上手い人がおつての、彼にコーチを頼んどるんじゃ」

久の言葉に続いて、まこが付け足すように言った。

「コーチ、ですか？」

「コーチって言っても、別に一緒に打ってもらうだけだから。少しでも部員以外の人も打てた方がいいでしょ？」

「確かに、それもそうだよ」

「だからまこに頼んで腕の確かな人を連れてきてもらうことになったの」

「コーチってどんな人なんだろう」

咲が呟くように言った。咲と和は部活からの帰り、二人で一緒に家路を歩いていた。

すっかり日は暮れて、電灯が照らす道を二人は歩いている。

「どんな人が相手でも、私は自分の麻雀を打つだけです」

「……それもそうだね。相手を気にしてもしょうがないや。でも怖い人じゃなければいいね」

「実力はまこ先輩が保証してくれてるから心配はしてませんけど…」

「でもまこ先輩の友達なら心配はいらなと思います」

二人は暗い夜道を、いずれ来る合宿の日々に思いを馳せながら歩いている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5417w/>

---

傀 kai-

2011年9月25日01時41分発行